

由利学生東京寮に込められた想い

寮の解散

新聞でも報道されたとおり、昭和32年に開寮して以来69年間にわたり運営されてきた由利学生東京寮が入寮生の減少により令和6年度末をもって閉寮しました。首都圏の大学や専門学校などに入学した、はじめは本荘由利地域の学生を、平成24年からは秋田県出身の男子学生を受け入れてきた由利学生東京寮は、これまで約500人の寮生を輩出しました。

この寮が設立された大きな理由の一つに、「経済的な理由で大学進学などを断念せざるをえない子どもたちがいる中で、経済的負担を軽減することで、より多くの学びたいと願う子どもたちにチャンスを提供すること」がありました。その意味からすれば、子どもの相対的貧困が社会問題となっている今日においても、この寮の果たしてきた役割は解決されえない課題への取り組みとして、いまだに大きな意味を持つものと思います。

人々の想い

あらためて由利学生東京寮の資料を見てみると、そこには当時の人々の熱意と強い願いを感じることができます。昭和30年頃は終戦から10年ほどしか経っておらず、まだ戦争の爪痕が随所に残っている時代でした。一方で、人々はがむしやうに戦後復興に突き進み、昭和33年に東京タワーを完成させるなど、まさに国中が映画「三丁目の夕日」で描かれていた空気感に満ちあふれていた時代だったと思います。

社会全体がそのような空気感にある中で、地方の若者たちがより広い世界で活躍したいとの志を持ち、新たな学びと挑戦を求めて都会に飛び立ちたいと思っていたとしても不思議ではありません。ただ、その夢を経済的理由であきらめなければならなかった若者たちがいたのも事実ですし、それは本人のみならず、有為な人材を育成し獲得する機会を失うことになる社会にとっても大きな損失であったはず。その意味からもこの寮は、大志を抱く若者と彼らが必要とする社会の両者に対してとても重要な意味を持っていたと思います。

そして、この文脈で由利学生東京寮の歴史を見たとき、あらためて驚かされたのは斎藤憲三先生と山崎貞一先生の存在の大ききでした。特に山崎先生の設立からその後のかわり方は、開設後も毎年のように寮を訪れて入寮生と対話をするなど、若者への期待と愛情を強く感じさせてくれるものでした。

4年前の市長コラムでも述べましたが、本荘由利地域はチャレンジする若者をみんなで応援していこうとする気持ちの強い地域です。今も昔もです。その具体の一つが、まさにこの「由利学生東京寮」だったと思います。

奨学金返還助成の拡充

日本学生支援機構の調査によれば、大學生の55%が何らかの奨学金を受給していることがわかっています。その平均借入額は300万円を超え、後々の重い負

担となっていると言われています。

いま全国の自治体の約半分弱が学生の奨学金返還に対する支援を行っています。にかほ市も7年前に奨学金返還助成制度を創設し、奨学金の返還金に対する助成を開始しました。

概要を簡単に説明すると、まず該当する奨学金は市・県育英会・学生支援機構などのほぼすべてとなります。対象要件としては、①市内に住所があり、実際に住んでいること、②市内外を問わず働いていること、③市税を滞納していないことなどがあります。また、助成額については年間6万7千円（上限）で、助成期間は条件により2年間もしくは3年間となっています。

先般、公益財団法人由利学生寮から、解散で残った財産をにかほ市と由利本荘市にご寄附いただきました。にかほ市には1億円余りのご寄附をいただきました。財団からは寄附金を地域の学生支援に活用してもらいたいとの申し出がありました。この意向は若者福祉の実現に向けた取り組みとも合致しますので、市としては現行の制度を財団の想いを尊重した内容へと拡充させていきたいと考えています。



にかほ市長
市川雄次

